研究だより No. 46

平成27年度 研究の概要

本校は何を研究しているか・・・・・1 「ものがたり」を踏まえた授業とは・・・2 個が響き合う共同体とは・・・・・2 今期の重点となる研究内容・・・・2~3 教科等の研究実践・・・・・・・・4~8 総合学習シャトル 総合学習 CAN・・9~11 研究文化の醸成・・・・・・・・・・・・・12 研究発表会のご案内・・・・・・・・・12

香川大学教育学部附属坂出中学校 発刊 平成 28 年 2 月 10 日

発刊にあたって



学校長 伊藤 裕康

春暖の候、皆様方におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

本校は、社会構成主義を基軸とした学びの在り方について研究を進め、学習指導要領の趣旨の本質について注意深く思考しながらも、新たな時代の新しい学びを拓くべく模索を続け、実践を積み重ねております。一昨年6月13日には、研究テーマ「『学ぶこと』と『生きること』の統合一語り合う合う中で、自己の『ものがたり』をつむぐー」のもと、ナラティヴ・アプローチとしての「語り」の研究を継続し、個々の学習者の学びの文脈に沿う学習指導法を「自己物語」の視点から追究するとともに、認知心理学の知見に基づく、認知的個性(CI)の学びへの活用についても研究を深め、生涯学習を視野に入れた「学ぶこと」と「生きること」の統合を具現化するカリキュラム構想について提案致しました。

本号では、これまでの研究の成果と課題を踏まえ、本年6月7日に開催予定の研究大会に向けての取り組みの概要を紹介しております。特に、個々の学習者の学びの文脈に沿い「自己物語」の視点から追究する学習指導として有効である「ものがたり」を、自家薬籠中のものにすべく志向した取り組みを進め、如何にしたら「ものがたり」をつむぐ授業と成り得るのかに苦心してまいりました。ご一読の上、ご意見やご示唆を頂戴できれば幸いに存じます。皆様には、どうか今後とも変わらぬご指導とご鞭撻を心よりお願い申し上げ、発刊のご挨拶とさせていただきます。

研究主題

「学ぶこと」と「生きること」をつなぐ「ものがたり」 - 個が響き合う共同体をめざして -

1 本校は、何を研究しているのか

生涯にわたって学ぶ意欲を育む生徒の姿を思い描いた時、知識や技能を習得させ、「わかる」「できる」という実感を持たせることは欠かせない。しかし、それだけで本当に学ぶ意欲は育まれるのだろうか。例えば、高校時代に必死に勉強し、難関大学に合格した途端に学ぶことをやめてしまう学生達がいる。この原因は、学ぶことの目的が「大学合格」であったからだと考えられる。この学生達は、与えられた課題の正解を効率よく見つけ出す能力は優れているが、自ら課題を見いだしたり、新たな提案をしたりすることは苦手である。まさに、目的が終わればそこで学びが終わり、「学ぶこと」と「生きること」が乖離した状態になっている。

そこで、本校は、この乖離してしまった「学ぶこと」と「生きること」を「ものがたり」を踏まえた授業でつなぎ、それによって生涯にわたって学び続ける学習意欲を育成し、自己形成を促す学習課程の研究を行っている。

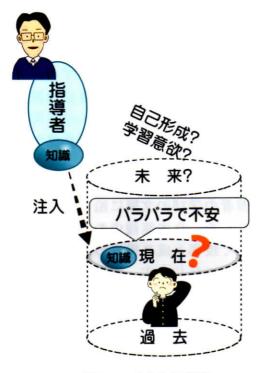
9

「ものがたり」とは・・・

「語り」という行為と語られた「物語」の両方を意味し、時間構造の中で学んだことを経験と関係付け、新たな筋道を生み出し、意味や価値を実感しながら自己を形成していくこと。

上記は、やまだ (2000)、野家 (2005)、伊藤 (2013) に着目し、本校独自で定義した。この 定義は、「社会構成主義」の学習観に基づいている。学習者は指導者から客観的な知識を与えられるのではなく (図1)、自ら教材や指導者、同じ学習をしている他者とのかかわりを通して、影響し合いながら知識を構成していくことが重要であることを主張している。

本校では、この構成された知識から筋道のある理解や新たな気づきが生み出されるとき、自分なりの「ものがたり」が生まれ、意欲が向上する(図 2)と考えている。この「ものがたり」を生み出すためには、個が主体となり周囲に能動的にかかわり続けなければならない。つまり、「ものがたり」の授業は、教育課程特別企画部会論点整理にもある「言語活動」を伴う「アクティブラーニング」にならざるを得ないとも言える。



【図1 一般的な学習観】



【図2 構成主義に基づく「ものがたり」を踏まえた学習観】

3 個が響き合う共同体とは

【個が響き合う共同体】

仲間とかかわる中で、聴いたり問うたり語り直したりすることで、個が主体となり新たな「ものがたり」を生み出していく共同体

4 今期の重点となる研究内容~「ものがたり」を踏まえた授業づくりのあり方~

今期は「ものがたり」の授業づくりの土台となる、個が響き合う共同体をめざすために、以下の①~③に重点を置いて研究を進めることとした。

① 個の文脈から新たな「ものがたり」が生まれる単元構成と問い

単元構成については、「ものがたり」の定義を踏まえ下記の7つの視点を考案した。

その1:各教科を通じて身につけさせる力(教科の本質的な意義)を踏まえる

その2:個の文脈(学習前の考えや経験、状況)を把握する

その3:学んだことが個の文脈と関係づけられるように構成する

その4: 新たな気づきや次への問いが生まれる題材を組み込む

その5:題材に埋め込まれた社会・文化、歴史、生態の文脈1にふれられるように構成する

その6:語り直しができる場面を設定する

その7:個の学びの文脈を把握し、単元を再構成する

② クリティカルに聴くことと問うことができる教師のかかわり方

クリティカルとは、相手の意見を否定するのではなく、与えられた情報や知識を鵜呑みにせず、 内容をよく吟味しながら聴くことである。相手の意見を「なぜか?」、「本当に?」、「根拠は?」 などの視点で吟味しながら聴くことで、新たな気づきや疑問が生まれるはずである。

また、クリティカルに聴くことができたなら、クリティカルに問うことも大切である。これも相手を否定するために問うのではなく、よりよい意見を引き出すために問うのである。聴き手は根拠について「なぜ?どうして?」と尋ねたり、「例えば?」と具体例を問うたりする。その過程

で語り手側にも新たな疑問 や気づきが生まれ、双方向 の語り合いができ、「ものが たり」は深まっていくと考 えられる。現在は、右図を 掲示し、全教科の授業で生 徒が活用できるようにしな



がら、具体的な教師のかかわり方を吟味している。

【説明に対しクリティカルに問う様子】

③ 他者の語りを聴いて語り直しができる教師のかかわり方

自己の思いを相手に分かってもらう場合には、語ることが繰り返し行われる。相手が「よく分からない」「納得がいかない」という反応をしたら言葉を変え、論理や筋立てを変えて語り直すことになる。このようなやりとりの中で、相手の視点が自己の中に入っていく。語り直すということは、相手の視点に立って、自己を見直し、新たな自己を発見するということでもある。



【他者の語りを聴いて語り直す様子】

また、語り直しには、語ることと同様に書くことも重要である。なぜなら、書くことによって 思いがあらわになっていくという面があるからである。他者のことばを自分の中に取り込み、自 分のことばとして表出できたときに、はじめて自分自身の見解が明確になっていく。自分の思い や考えを書き残しておくことで、時間構造の中で自己の学びを語り直す手立てにもなるのである。

・・・(省略) 今回の授業を通して物理が好きになった。慣性と聞くと、以前は私には関係の無い難しい言葉と感じていたけど、今ではとても関係のある身近な言葉だと思う。また、友達の語りを聴いて慣性の規模は大きいなと感じたことがある。それは「地球の自転さえも急に止まったら私たちは前のめりになるのでは」という考えである。私はこの考えを聞いて納得すると同時に疑問も生まれた。それは、地球の自転は等速ではあるが直線運動ではなく円運動であるので、慣性には関係ないのかということである。等速直線運動ではないが等速なので慣性と何か関係がありそうな気がした(省略)・・・【第3学年 理科「運動と力」の生徒の「ものがたり」より】

5 その他の主な研究内容

- ◆共通学習・総合学習シャトル・CANのカリキュラム整備 ◆教師の研究共同体づくり
- ◆すなおな気持ちで語り合える空間づくり
 ◆認知的個性を活かした学習支援のあり方

¹ 文化・社会的文脈:人により言語化されているもの 例)民話、神話、詩、劇、年、季節、月、日、昼夜人間の行為、宗教 歴史的文脈:題材に関係する歴史の変遷 例)跳び箱が現在の形状に至るまでの歴史、三平方の定理が導き出されるまでの歴史 生態的文脈:自然が生み出している現象や人間の生態 例)気象、天体の運動、海の干潮満潮、重力、手足の形状、花のつくり

《国語科》

言語による認識の力をつけ、

豊かな言語文化を育む国語教室の創造

— ものがたる力を高めるための指導・支援のあり方 —

国語科では、言葉を獲得し意味づけ、価値を実感していく過程を通して自己を形成していくことを「ものがたり」ととらえている。「ものがたる力」とは、「ものがたり」を生み出す深い語りができる力のことを指す。自己を「ものがたる」ためには、よりよい言葉の語り手であり、聴き手である必要がある。言葉を真に自己のものとして獲得していくための、互いに深め合う語り合いの成立する共同体への支援のあり方について明らかにしていく。







川田 英之



① 「ものがたり」をつむぐ単元構成の在り方

教科の本質を貫き、課題を考えるための知識や経験が無理な【考えを互いに語り合い、聴き合う様子】 く学習者の文脈に組み込まれていくような「ものがたり」を生み出す単元構成を考える。

② 教科の本質を貫き、「ものがたり」を生み出す学習課題の追究

「他者に語りたくなる意味」のある学習課題を目指す。語るためには、「語りたい」という意欲が必要である。そして、「聴きたい相手」の存在が不可欠である。ともに学ぶことへの期待、そして自分自身の言葉が豊かになったという実感ができるような課題を追究する。

③ 質を高める語り合いの追究

聴き手の反応は、語り手の語り方や、話す内容に影響を与える。既有知識や体験を通した「語り」とともに、さらに、聴くときには、その語り手の枠組みを意識しながら聴くようにする。相手の語りと自分の語りが融合したときに、自分一人で考えていたときとは違う新しい「ものがたり」が生まれる。

《社会科》

豊かな社会認識の形成と能動的な社会的実践者の育成を めざした社会科学習のあり方

一社会的自己物語をみがきあう共同体づくりを通して一

山城豊彦



山城 貴彦 · 大和田 俊

民主社会の形成者を育成するためには、豊かな社会認識の形成を 図るとともに、どう相手が考えているかは分からないという不確実 な状況の中で、意思決定し、さらに合意形成していく力を持った社 会的実践者の育成が必要不可欠である。この二つのバランスをとっ た社会科学習のあり方を研究する。

(1) 学習者間の有意義な差異を生み出す問いや学習課題のあり方

有意義な差異とは、学習対象となる社会的事象の見方や解釈 などの差異、社会のあり方などについての意見や判断に関する 差異のことである。



【考えを語り直している様子】

それらの差異を生み出すために、以下のことを行う。

- ・ 学習前のひとつの社会的事象に関する生徒の意識や学習中の生徒の考えの変遷を把握し、生 徒の文脈に沿った問いや学習課題を構成する。
- ・ 社会的事象について多元的な視点と豊かな情報量を備えた教材開発と授業構成により、社会 的事象に選択肢があることを気付かせ、多面的・多角的に検討させる。

② 学習者間の差異の有意義な交流を生み出す単元構成の工夫

学習課題に対する個の考え方を事前に分析し、学習の展開に応じて考え方が同じ集団や異なる 集団で対話を設定する。

③ 社会的自己物語を深めるための語り直しの場の設定

当事者性をもち、他者とともに学びあった中で、書き換えられた「物語り作文」を活用した社会的自己物語、価値判断や意思決定について、語り直しを行える場面を設定する。

《数学》

数学から学ぶことの価値を実感する「振り返る活動」 - 数学の本質に気づく「問い」と

数学と自己とのかかわりを見つめ直す「語り直し」 -

数学科では、「数学から学ぶことの価値」を実感させるために、 自分と数学とのかかわりを見つめ直すための振り返りのあり方や 自分とは異なる考えをもった者との対話のあり方について研究を 進めてきた。その成果として、交流し学び合うことで生徒に新た な気づきが生まれてきた。

今期の研究では、数学を学んだ自分が、数学に何を学んだのか を自覚すること、すなわち、「数学から学ぶことの価値」を実感で きるようにするために、数学の本質に気づく「問い」と、自己と 数学のかかわりを見つめ直し、自己の形成につなげるための「語り 【キーワードで対話し語り直す場面】



直し」について研究を進める。「語り直し」では、学んだことを「キーワード」で表現して対話したり、 「単元まとめレポート」を作成して、自己の学びの変容をまとめたりする実践を行っている。

- 研究の内容は次の4点である。
- 「数学から学ぶことの価値」を実感させるために適している学習課題の工夫
- 数学の本質に気づき、新たな「問い」が生まれる工夫 (2)
- (3) 数学とのかかわりを見つめ直し、個が響き合う「語り直し」の工夫
- (4) CI を活かした学習活動の工夫

《理科》

科学的な見方・考え方を高め、

理科を学ぶ意味や価値を実感できる生徒の育成

- 科学する共同体(コミュニティ)のなかで つむがれる「ものがたり」を通して一

理科では、教科の本質を「自然の摂理や真実を解明する過程 を学び、科学的な見方や考え方を育成すること」と捉えている。 前回は、探究の過程における語りとそのなかでつむがれる「も のがたり」に着目し、研究を行った。その結果、「ものがたり」 を意識した単元構成や探究活動が、科学的な見方や考え方の育 成や理科を学ぶ意欲の向上に有効であることがわかった。そこ で、今期は「科学する共同体」という視点を踏まえ、生徒の中 により深い「ものがたり」がつむがれるように、次の3つを柱 として研究を行っている。



若林 教裕



鷲辺 章宏



【観察から生まれる新たな気づき】

【研究の3つの柱】

- ① 個の文脈と探究の過程を踏まえた単元構成
- ② 科学的に聴き合い、問い合う空間を創り出す工夫
- ③ 自己の学びを語り直し、理科の「ものがたり」をつむぐための学習記録の活用と工夫

理科における「ものがたり」(の授業)とは

探究の過程において、自己と様々な文脈とが擦り合わされることで、自然事象を新たな見方や考 え方で知性的、感性的に捉えなおすこと(のできる授業)。

≪音楽科≫

音楽のよさや美しさを味わうことのできる音楽学習のあり方 ーかかわりのなかで語り直し、音楽の「ものがたり」を深める-





堀田 真央

可児 智恵子

音楽科では、将来にわたって音楽のよさや美しさにかかわ る可能性を広げ、より豊かに生きる力の育成をめざしている。 授業においては、言葉や音楽を通して意図や思いを語り合い、 音楽のよさや美しさを実感し、自分と音楽とのかかわりを振 り返るなかで「ものがたり」をつむがせてきた。

今期は、これまでの研究を引き継ぎつつ、音楽や教材の背 景、他者、音楽とのかかわりをより充実できるよう研究を進 めている。また、自己の音楽観を見つめることを通して音楽 の「ものがたり」を深め、音楽を学ぶ価値を実感できる授業 づくりについて追究している。



【他者と思いを伝え合う様子】

音楽科における「ものがたり」とは、これまでの経験や授業の中での学びを関係づけ、自己の 音楽観を更新する中で、価値を実感し、自己を形成していくことととらえている。「ものがたり」 を深めるために、①音楽観を広げ深めるための多くのかかわりを生み出す単元構成・学習課題の 工夫、②「共通事項」を支えとして聴きあい、思いや意図を伝え合う活動の工夫、③かかわりを 振り返り語り直すための工夫を行っている。かかわりを充実させることによって、これまで気づ かなかった音楽のよさや美しさの実感につなげていきたいと考えている。

《保健体育科》

運動の魅力を実感し、生涯にわたって

運動に親しむ生徒を育成する保健体育学習 ースポーツの持続的実践への問い続ける「ものがたり」共同体





三字 健司

石川 敦子

保健体育科では、これまでの研究で、コミュニケーション活動によるネットワーキングや対話 に着目し、人とのかかわりの中から学びの意味や価値を実感できる保健体育学習を実践してきた。

また、生徒の思考や価値観がぶつかり合うような「語り合う」 場面設定やそのあり方を工夫することで、生徒の中にどのよう な新しい気づきが生まれてくるのか研究を進めてきた。

今期は、これまでの研究をふまえ、運動やスポーツを多様な 方向からとらえ、「ものがたり」を重視した授業づくりを行い、 パフォーマンスの変化、それに伴う生徒同士のかかわり方の変 容、単元での生徒の語りの変化などから、体育授業における生 徒の意識や意欲の変容について研究する。

本年度は、単元を通して問いの設定や生徒の疑問やつぶやき を取り上げる柔軟な単元構成に配慮して授業実践を行った。ま た、ゲームのデータを活用・分析することで仲間同士がクリテ ィカルに聴く・問うなど、知的にかかわる学習活動を行った。 チームプレーの変化が体育授業に対する意識や意欲にどのよ うな変化をもたらすかについて研究を進めていきたい。



【「なぜ?」が共同体を育てる】

《技術・家庭科》

- よりよい生活をめざす意欲・態度を育む技術・家庭科教育
 - 生活を見つめ、語り直すことで生まれる新たな自己ものがたり





渡邉 広規 池下 香

技術・家庭科では、「よりよい生活」をキーワードに継続研究を進めている。そして現在、「よりよい生活」を、次のように捉えている。

- ①持続可能な社会を作り続ける一人であることを意識した生活
- ②どのように生活を工夫し創造するか決定し、実践する生活
- ③生活を振り返り、学んだことと生活を結びつけ、そこで生まれた 新たな概念やものの見方を未来へつなげようとする生活

自分の生活に関わる「ひと・もの・こと」や他者と対話し、多様な考えや価値観に触れることを通して、学んだことと自分の生活を結びつけながら、新しい気づきをもとに新たな自分の生き方や考え方を形成していくことを「ものがたりをつむぐ」と捉えている。今期は、新たな自己の発見や、新たな学びの価値を実感させ、よりよい生活をめざす意欲・態度を育成する。そのために単元構成における初期、もしくは中間において新たな自己を発見させるとともに、生徒の個々の語りを表出させ、個の文脈に着目した学習課題や批判的思考で「聴く・問う」ができる共





【批判的思考で語り合う】

同体づくりのための対話の工夫を行う。他者と考えをすり合い、知識・技能・感性を結びつけて 自分の言葉で語り直す場面を設定することは、自己の生活を見つめ直し、新しい解決方法や最適 解を創造することとなり、未来の生活そして生き方を展望できる力につながると考える。

《外国語科》

コミュニケーションへの意欲を高める英語授業の創造

一つながり、伝え合う言語活動における「ものがたり」を通して一





明田 典浩

伊賀 梨恵

外国語科では、言語活動における対話や振り返りの内容によって、言葉の世界の広がりや奥深さ

を実感させ、英語を学び続ける意欲を高める研究を進めてき た。今期は、

- (1) 生徒が英語を使いたくなったり、ことばの多様性や 奥深さを実感したりする単元構成と課題設定
- (2)「ものがたり」をつむぐ共同体へのかかわり方の工夫
- (3) 自己の学びや英語とのかかわりを見つめ直す語り直し、振り返り活動

について研究を進める。言語や文化に対する意識を高め感性 を養う授業構成、日本語と英語による表現の相違により意思 疎通がうまくいかない場面の設定など、単元構成と課題設定を 工夫する。



【自己の学びを語り直す様子】

また、生徒の学習課題に関するレポート内容や英文の分析により、個々の学びの状況を考慮した グループ編成を行うことで、言語や文化に対する新しい気づきを生まれやすくさせる。

さらに、「ものがたり」をつむぐためには、授業中の気づきやこれまでの学びを既有知識や経験と体系化して、英語に対する理解を深めたり、自分と英語とのかかわりを見つめ直したりすることが必要である。授業中、授業後や単元後に自己の学びや英語とのかかわりについて語り直しをさせることで、英語を学ぶことを意味づけ、価値を実感させる。

《学校保健》

生涯にわたる健康で健全なライフスタイルの確立をめざして





髙岡 加苗

学校保健では、さまざまな健康課題に対処し、健全なライフスタイルを確立するためには、根 底となる生徒の自尊感情の変容・形成を促し、「自分をこれでよい」といった感覚を養えるような 健康教育が必要であると考えている。そこで、自尊感情が低下しないようその下支えとなる健康 教育が求められると考え、WYSHプログラムを含む性教育、ライフスキル教育を取り入れた保健学 習の実践を継続してきた。

今回の研究では、集団への指導として危険行動を抑止し自分や他者を大切にしようとする、心 の予防的な教育の取り組みを実践したいと考え、1年生を対象に予防教育を行った。予防教育とは、 心身の健康や学校での適応上の問題に予防的に対処するため、学校で実施していく教育である。

ここでは、すべての生徒が将来的に健康や適応上の問題をもつ 可能性があると考え、問題をもたないうちにすべての生徒を対 象に実施する。教育の実践後、自分に対する評価には、殆ど変 化が見られなかったが、クラス成員についての評価は教育によ る改善(クラスのみんなが他者の考えや気持ちを想像したり、 人助けに必要な気持ちを感じたりすることができるようになっ ているという評価の高まり)が見られた。学級集団の向社会性 が育まれる中で、個々の自尊感情にも変容がもたらされたのか など、引き続き研究を進めている。



【相手の気持ちを予想しあう様子】

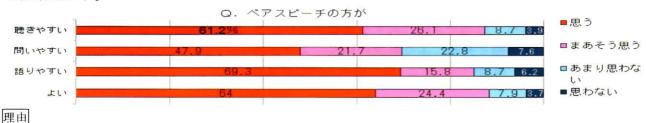
すなおに語れる空間づくり

個が響き合う共同体を形成するためには、すなおに語れる空間 づくりが重要である。そのために今期は、生徒主体の特別活動や 道徳・学級活動の充実、帰りの短学活で行うスピーチの活性化を 重点的に取り組んだ。

スピーチは、今期から日直のペアで対話形式 (ペアスピーチ) をとる方法で行った。スピーチのテーマは、文化部の生徒が毎週 決め、全校で統一した。その結果、1人でスピーチしていたとき よりもフロアーが深く聴き、問いかけをする場面が多く見られた。【写真を使ってスピーチをする様子】 語り方の工夫として、教師側は①聴衆に問いかける②実物や写真



を用意する③黒板を利用する、という3つの視点を示したが、生徒同士で真剣に打ち合わせをす る姿なども見られ、以前よりも一生懸命に取り組んでいる。以下に生徒アンケート(12月実施) の結果を示す。



- ○「相手のことを理解しやすくなった」「2 人の共通点や違いが見える」「対話が面白くてあきない。」「相手が話した ことについて質問する練習にもなる。」
- ●「事前に相談するのが大変。」「予想しなかった問いが来ると困る。」「スピーチの中で質問を言われてしまうことが あるから考えるのが大変」

今後も、課題を踏まえ、互いがすなおに語れる空間づくりにつなげていきたいと考えている。

総合学習シャトル

1 平成27年度(5月~7月)の実践

総合学習シャトル(以下シャトル)のねらいは、探究スキルの習得と、教科学習における活用と 総合学習 CAN (以下 CAN) における探究とをつなぐことにある。

前回の研究で、「CAN の探究の質を高めるために生徒にとって有効なスキルを学ぶシャトルはどうあるべきか」という課題があげられため、今期は、各クラスターの CAN における探究課題を分析し、「実験」「創造」「調査」の三分野に分けた新たな講座(図1)を開発し、探究の基本的な手順や技能の習得ができるように構想した。

また、各講座には、互いの研究内容をよりよくしていくために 21 世紀型スキルとしてもあげられている「批判的な読みや問い」ができる場面を組みこんだ。

400	O TILLIDIA BLOO	() 初田 と / 吐 / ~ C / O / C 8
分野	講座名	習得する探究スキル	講座内容
実験	変数の扉	着眼する 条件制である 場連づいに見る 批判較する見る 比較係を見いだす は判論する 説得する 説得する	探究活動において必然となる変数への着目の仕方や変数制御の方法を習得しながら、自ら実験を計画できる力を育成する。その際、ストローロケットの性能を向上させるための実験を通して、データを批判的に思考したり、複数回とったりすることの意義にふれ、CANで活用できる探究スキルの向上をはかる。変数の基礎を学び、実験を構想したり、結果を関係づけたり、批判的に見たり、考えたりする力を養う。
創造	附坂中的 劇的ビフォー アフター ~みんなで匠に なろう~	調査する 着眼する 比較する 分質問得する 説得する 批現する 表現する	「学校に必要なものや足りないものを見つけて、その企画書を作ったり、実際に創作したりする活動」を通して、CANで活用できるスキルや探究の仕方を身につけていく。必要なものを探し、なぜそれが必要なのか、それを作るにはどのくらいの期間・費用が必要か、などのことについて考えることで、調査する力や着眼する力を育てていく。また、相手の企画書を分析し、自分の企画書を見直すことで、比較する力、分析する力、批判的に考える力も養っていく。
調査	じゃんけん 必勝法	着眼する 発想する 比較する 関連判的に考える 批評価する 伝達する 説得する	じゃんけんの必勝法の真偽について実際に調査を行い、調査方法の基本的なスキルを身につけることを目的とする。必勝法の真偽を明らかにするためには、どれくらいの人に、また、どんな人を対象にじゃんけんを行うのが適切かを検証したり、お互いに行った調査方法を批判的に検証したりする活動を通して、CANで活用できる探究スキルの向上をはかる。

図1 27年度実施の3講座

さらに、CAN の探究時間を確保するため、昨年度までの基礎編・実践編を統合して一般講座とした。 8 時間編成の一般講座において、教師が設定した課題を解決しながら、その講座で学ぶ探究スキルを体験し、探究の仕方をより確実に習得できるよう工夫した。一般講座終了後は、特設講座として、16 講座から生徒が二つを選択し、自分に必要なスキルの補充を行った。(図2)。

一般講座: 各講座内容を学ぶ中で、探究

スキルを習得する



ストローロケットの飛距離に 関係する変数を 自分たちで設定 し、探究する様子 特設講座: アンケートやデータ収集など特化し た探究スキルを補充する



新聞記事に書かれた内容から小見出しをつけたり、情報を精選したりして表現している様子

図2 総合学習シャトルの流れ

27年度実践後の結果は、図3の通りである。

生徒へのアンケート

はい□4-□3-■2-■1いいえ

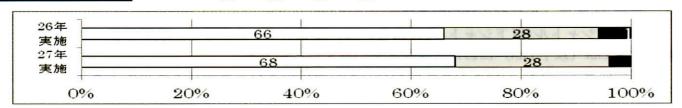


図3 シャトルを通して、CANにつながるスキルが身につきましたか?

- ○今年のほうが何のスキルを身につけさせようとしているかが分かりやすかった。
- ○僕の CAN では実験に説得力を持たせることが難しいと思うので、その説得力というもののもとになる条件制御や変数について学ぶことができたのは大事なことだと思う。自分の探究を発展させるために大事なことが学べたので、身についたと思う。
- ○CANでのアンケートやインタビューでどのようにすれば適切なデータがとれるのかよく分かっていなかったからとても役立った。

CAN につながるスキルが身についたと考える生徒が増えている。新たな講座の開発により、シャトルで学ぶのは「探究に必要なスキル」であるという意識の高まりとともに、生徒にとって「今まで以上に CAN につながる探究スキルが身に付くような学習」になったと考えられる。

2 平成28年度の構想

探究スキルを学ぶ場としては有効に機能する一方、探究過程の中でクリティカルに聴いたり問うたりすることに課題が残った。今後は各講座内容で、互いにクリティカルに聴いたり問うたりすることができる場面を効果的に設定し、CAN の探究をさらに深められるよう、探究シミュレーションの充実を図っていきたい。

総合学習 CAN

1 平成27年の実践

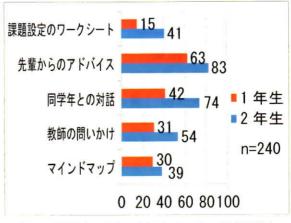
								【活動の時期と概要】								
								総台	今学習シャトル・CAN							
冬休み・1 月・2 月 1 人 CAN				3・4・5月					6月		7・8・9月			10・11月		
1人 CAN (個人で課題設定)			2人 CAN→3人 CAN (課題再設定・クラスター編成)						探究スキル習得		探究活動・発信			発表・発信・振り返り		
ガイダンス&課題設定	3年から探究のアドバイス	課題の再設定	第1次編成(新2・3年がペア)	課題の再設定・探究方法の練り直し	1年へのプレゼン準備	1年ヘプレゼン	第2次編成(2・3年と新入生が	クラスター完成・課題再設定・探究方!	ンを体験させる。	探究活動	CAN の日計画	の方から情報を得たりする場1日かけて校内で調査をしたり、 CANの日	質問を中心に明確にしていく場各クラスターでの探究内容の本でAL会議	たり問うたりして評価し合うポスター発表を行い、互いに研究プレ発表	がステージで発表 プレ発表で評価された代表の数 文化祭での発表	研究成果集の作成
	/	/	/		ガイダンス		組む)	仏の練り直し	ミュレーショな学習の探			外部や専門	貝の課題を	内容を聴い	クラスター	
	1人で	1人 CAN 人で課題設	1人 CAN 人で課題設定)	1人 CAN 人で課題設定)(I	1 人	1人 1人 2月 2月 2月 2月 3年から探究のアドバイス 2月 3年から探究のアドバイス 2月 3年から探究のアドバイス 1年へのプレゼン準備 ガイダンス&課題設定 ガイダンス&課題設定	1 大 1 大 1 大 2 類 1 年へのプレゼン準備 1 年へのプレゼン準備 ガイダンス&課題の再設定 ガイダンス&課題の再設定 ガイダンス&課題の再設定 ガイダンス&課題設定	1 人	T AN (A)	(マニュー	CAN	TAN CAN の日計画 探究活動 探究方法の練り直し 東題の再設定・探究方法の練り直し 東題の再設定・探究方法の練り直し 東型の再設定・探究方法の練り直し 東型の再設定・探究方法の練り直し 東型の再設定・探究方法の練り直し アイダンスを課題の再設定 アイダンスを課題の再設定 アイダンスを課題の再設定 アイダンスを課題の再設定 アイズア アイズ	(CAN の日) (CAN の日) (CAN の日) (CAN の日) (CAN の日) (CAN の日) (CAN の方から情報を得たりする場 (CAN の日) (でまり、	AL会議 AL会表 ALAAAA ALAAAAA ALAAAAA ALAAAA ALAAAAA ALAAAAAA ALAAAAA ALAAAAAA ALAAAAAA ALAAAAAA ALAAAAAAA ALAAAAAA ALAAAAAA ALAAAAAAAA	AL 会議	文化祭での発表 文化祭でのアドバイス 文化祭でのアドバイス 文化祭でのアドバイス 文化祭でのアドバイス 文化祭でのアドバイス 文化祭でのアドバイス 文化祭でのアドバイス 文化祭での発表で評価された代表の対象を得によるで表表を行い、互いに研究の表表を行い、互いに研究の表表を行い、互いに研究の表表を表示が、アンの経験 文化祭での発表を行い、互いに研究の表表を行い、互いに研究の表表を表示が、アンの経験 文化祭での発表で評価された代表の表表を表示が、アンの経験 文化祭での発表で評価された代表の表表を行い、互いに研究の表表を表示が、アンの経験 文化祭での発表を行い、互いに研究のアドバイス 文化祭での発表を行い、互いに研究の表表を表示が、アンで発表を行い、互いに対象表表を行い、互いに対象表表を行い、互いに対象表表を表示が、表表表表表表表表を行い、互いに対象表表を行い、互いに対象表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表

CAN: **Cluster** (クラスター)、**Action Learning** (アクション・ラーニング)、**Narrative Approach** (ナラティヴ・アプローチ) の頭文字をとったものである。生徒自身が自己の「可能性」を見出していく学習にしたいという願いが込められている。

2 平成27年の新たな実践

○課題設定へのかかわり

総合学習 CAN では自由に探究課題が設定できる一方で、課題設定に悩むクラスターが多く見られた。また、課題設定の際の教師のかかわりに課題が残った。そこで、今期は「課題設定のコツ」というワークシートを考案した。この手立てには、生徒が探究課題(テーマ)を STEP 1~3と段階的に考えられるようにし、教師や生徒が質問をしてかかわりながら気づきを促していくという工夫がある。実施後は、「~を作ろう」という単純な課題ではなく、解決の方法や、何を調べどのようなデータからどう結果を出すかまで考えられた課題に変容したものが多く見ら



【図1 課題設定のときに有効だったのは?(複数回答)】

教師

れた。(下図参照)

課題設定における教師のかかわりの工夫

STEP 1

テーマの段階⇒例『再生可能エネルギー』の研究

まずテーマの答えが出せるよう聞いの形式にすると?

STEP 2

問いの段階 ⇒例『再生可能エネルギーはエネルギー問題を解決できるか?』

「問い」の対象や解決するために必要なデータを考えると?

STEP 3

課題の段階 ⇒例『屋上に設置した自作の風力発電機で豆電球を最高何個まで点灯 させられるか?』

〇AL会議(質問会議)の実施

AL会議とは、探究での問題を抱えたメンバーに対し、参加者全員が意見でなく質問のみを行い、本人自身に「本当の問題の原因」に気づかせる会議である。教師は司会者に徹し、答え導き出すというより、メンバーに質問や振り返りを促し、本人への気づきを大切に一歩ずつ会議を進めていく。実施後の生徒の感想は、多くが肯定的で、以下のような感想を述べている生徒が多数であった。



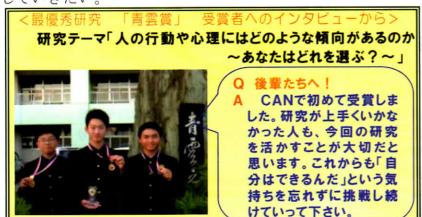
【AL会議の様子】

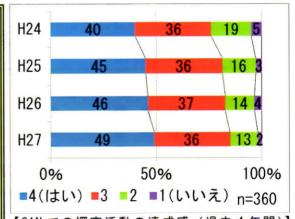
【AL会議後の生徒の感想】

- ○自分たちの課題テーマの欠点に気づかせてくれた
- ○他のクラスターから質問されて方向性が分かった
- ○質問をされて探究方法が深まった

3 平成 28 年への構想

今期は文化祭やプレ発表などの発表の場において、聴く・問う活動に課題が残った。今後の CAN では、クラスター間で「なぜ?」「どんなデータから?」「もし~なら?」など、課題や探究方法 などをよりよくするために互いにクリティカルに聴くことと問うことができる空間づくりを工夫していきたい。





【CAN での探究活動の達成感 (過去4年間)】

研究文化の醸成

1 大学出前授業

香川大学の各学部の先生を講師としてお招きし、生涯学習、キャリア教育の一環として実施している。本物の研究者から、CANへのヒントをいただく機会となることも期待している。

学部	講師	内容
教育学部	加藤みゆき	お茶博士になろう
法学部	春日川路子	民事手続きと民事裁判-民事ってな
経済学部	天谷 研一	駆け引きの科学~ゲーム理論の世界 への招待~
医学部	藤井 豊	ウイルスと人類の戦い
工学部	石井 知彦	貴重なお砂糖、『希少糖』~目に見えな い構造を見る~
農学部	野村 美加	植物の不思議

2 親子セミナー

前期は作花典男先生(元 香川県校長会長)より「君が 主役だ!」という演題で、後 期は竹下和男先生(子ども が作る"弁当の日"提唱者) より「子どもを台所に立た せよう」という演題で、これ からの生き方や考え方につ いてご示唆をいただいた。





教育研究発表会のご案内(第1次案内)



副校長 小林 理昭

この度、下記の日程で、平成28年度教育研究発表会を開催するはこびとなりました。つきましては、ぜひご参会いただき、ご指導・ご助言を賜りたくご案内申し上げます。

- 1 テーマ 「学ぶこと」と「生きること」をつなぐ「ものがたり」一個が響き合う共同体をめざして一
- 2 日 時 平成28年6月17日(金) 8:50~16:30
- 3 内 容 全体提案
 - 公開授業(教科、総合学習CAN)
 - 教科、学校保健提案・授業討議
 - 講演 東京大学大学院教育学研究科教授 秋田 喜代美 先生

※28年度は都合により美術科の公開授業及び授業討議は行いません。

 編集
 集 委 員

 若林教裕
 山城貴彦

 大前和
 弘 渡邊広規

 大和田 俊 伊賀梨恵

 石川教子 堀田真央

平成 2 8 年 2 月 1 0 日 編集 香川大学教育学部附属坂出中学校 〒762-0037 坂出市青葉町 1 番 7 号 TEL/ 0877-46-2695 FAX/ 0877-46-4428 E-mail sakachu@ed.kagawa-u.ac.jp